

Shokei News

発行

茨城県立土浦第二高等学校尚絅同窓会
〒300-0041 茨城県土浦市立田町9番6号
TEL: 029-822-5027(代)
FAX: 029-826-3522
<http://www.tsuchiura2-h.ed.jp>

印刷 株式会社 サラト

〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172
TEL: 079-284-1380
<http://www.salat.co.jp/>



総会のお知らせ

平成27年度尚絅同窓会総会を開催します。

日時 平成27年 6月6日(土)

時間(日程)

- 12:30 受け付け開始
- 13:00~13:40 尚絅同窓会総会
- 13:40~14:00 記念撮影
- 14:15~15:15
A、R、C コンサート
(ア、エレ、セ)… スペイン語です。
(ひばり、バラ、梅)
曲 アルゼンチンタンゴ 他
啼 鵬(ていほう) 氏 (バンドネオン)
山下亮江(やましたあきえ) 氏 (ヴォーカル)
角 圭司(すみけいし) 氏 (ギター)

会場 ホテルマロウド筑波

〒300-0042 茨城県土浦市城北町2-24

TEL: 029-822-3000 FAX: 029-822-3244

JR常磐線 土浦駅西口より徒歩約15分



総会出席予定の方のみ、同封のFax用紙にてFax送信をお願い致します。締切りは5月27日(水)と致しますが、当日の急な参加も大歓迎です。



ご挨拶

会長 坂本 喜久江

尚綱同窓会会員の皆様お健やかにお過ごしのこととお喜び申し上げます。尚綱ニュース発刊に際し一言ご挨拶申し上げます。

母校土浦二高も、歴史と伝統に支えられ創立110周年の節目を迎えることとなり去る25年11月2日記念式典を開催致しました。記念事業として、生徒昇降口に校章ステンドグラス、体育館のステージ脇に校歌レリーフ、記念誌を発行致しました。本校は明治36年5月、日露戦争前夜という騒然とした国情の中、県南地域の女子教育への熱い思いにより茨城県立土浦高等学校として開校されました。その後昭和23年の学制改革により校名が茨城県立土浦第二高等学校となり、平成6年4月男女共学推進モデル校に指定されたことにより、男女共学の高校となり現在に至ります。県内随一のモダンで立派な建物に男子も約半数在籍します。心豊かでバランスの良い生徒集団であり、女子教育の名門から共学となっても明朗で自由な校風が伝統としてあり、同窓会としても誇りに思い積極的に学校への後援体制の推進を図っていく所存です。卒業生も四万人を超え、二高で学んだことを誇りとし、「衣錦尚綱」の精神の元、県内はもとより各県内外の各界で活躍されており、男女共学化されて20年となり、男子生徒も女子生徒もほぼ同数入学し、夏の高校野球大会には規律ある応援と相まって二高生らしい清々しいブレイを見ることができました。しかし残念なことは二高の専用野球場が無いことです。

又今年は高校生の文化と芸術の祭典第38回全国高等学校総合文化祭「いばらき総文2014」が7月27日～7月31日の期間茨城県が会場となり開催されました。土浦二高は、日本音楽部の事務局となり、飯塚弘之校長先生が委員長に就任されました。「創造の花を咲かせよ響える筑波嶺、吹き抜ける文化の風」の大会スローガンのもと、文化を茨城から全国へ発信しようとする高校生たちの凛とした姿や、自分たちの手で素晴らしい物を造り上げようという意志を持って行動している姿に感動しました。

今年私が感動したこととしては、女子教育の大切さを訴えたパキスタンの少女マララ・ユスフザイさん17才へのノーベル平和賞授与が決まったことです。ノルウェーのノーベル賞委員会が行ったオフロでの会見では「授与は若過ぎるのでは」との質問でしたが、委員長は「マララさんのおかげで児童労働に関する国際会合も開かれ国連も取り組みが始まっている」と反論しました。「銃弾で私を黙らせようとするやり方は失敗に終わった。本とペンこそが最後の武器である」と語るマララさん、私はマララさんの勇気を称えと共に、ノーベル平和賞を与えた委員会の皆様に賞を与えたいと思います。最後になりましたが同窓会として今後共子供たちの為学校の為応援させて頂きます。結びに皆様のご健勝を心からご祈念申し上げます。ご挨拶にかえさせて頂きます。



『人材育成』

校長 飯塚 弘之

尚綱同窓会会員の皆様には日頃より本校の教育活動に対し、多大なるご理解と温かい励ましをいただき衷心より感謝申し上げます。

昨年は、同窓会の方々のご尽力により創立百十周年の祈念すべき式典を挙行することができ、一つの大きな節目を通過いたしました。今年は、百十一年目ということで、新たな飛躍のために教職員と力を併せ、本校のさらなる充実と地域から絶大な信頼が寄せられる学校を目指して努力してまいりたいと考えております。

現在の日本は、輸送・通信分野の急激な技術進歩により国と国との時間的・空間的距離の短縮が進んだことや、国内の企業が製品コストを削減するために工場を海外移転を進めたことにより、グローバル化が急激に進んでいます。企業は国外の企業との競争に勝つために、国内外の様々なシーンで活躍できる「グローバルな人材」の獲得と育成に力を注ぐようになってきています。国内においても、人々の価値観の多様化、少子高齢化等、社会の急速な変化が進んでおり、それらに的確に対応することが求められております。

す。このような状況の中で、「知・徳・体」を基本に、思考力・判断力・表現力等、主体性のある「人づくり」が重要であることを改めて認識し、これからの日本を支えていく人材を育てていくことは、我々教育に携わる者の使命だと考えております。

土浦二高も百十年という歴史のなかで、多数の有為なる人材の育成を行ってきました。多くの卒業生が、地元だけでなく日本全国さらには世界と様々な場所で活躍し、社会の発展に貢献してきました。本校の実績については、胸を張り、誇りに思っており受け止めておりますが、現状に甘んじて満足することなく突き進むことが必要であり、それが本校のさらなる飛躍に繋がっていくと考えます。

今後、本校と本校に学ぶ生徒のために何ができるのか、何をすべきかを模索し、有効な手だてを見いだし、社会に貢献できる人材育成に全力で邁進してまいりたいと思います。

最後に、尚綱同窓会の皆様には、これまで同様、母校土浦二高へのご協力とご支援をお願いする次第です。



「Shokei News」創刊のころ

市川 彰 (旧職員)

私は、平成十六年度から三年間、教頭としてお世話になりました。

この頃の土浦二高は、教育環境の整備が進み、学習指導や部活動においても、日の出の勢いを感じさせておりました。男女共学校として学校の基盤が固まるなか、平成十四年には新校舎竣工、平成十五年には創立百周年記念式典が行われました。

平成十六年度は、私の教員人生のなかでも特に刺激的な一年でした。中村昌平校長は、創立百周年を節目として「変化の激しい二十一世紀を果敢に切り開き、リーダーシップをとれるスケールの大きい人材の育成」を旗印に、教職員が一体化し、PTAや同窓会の方々にもできる限りご協力をいただきながら、教育にあたることを強調されました。

私の仕事は、この教育方針を具現化していくことであり、とてもやり甲斐のある仕事でした。平成十六年度の仕事のなかから、いくつか述べさせていただきます。

「規程」関係では、教職員が一丸となって教育活動に励む前提として、一年間をかけて「校内諸規程集」を整備しました。学校全体としての共通理解を深めるためには不可欠のことでありました。同時に、時代の変化に合わせて「PTA会則」の変更を行いました。また、平成十六年度には「PTAOB会」を設立しました。すでに旧職員の会（睦友会）は長い歴史を刻んでおりましたが、PTA役

員経験者の方にも土浦二高の教育発展に関わっていただくことを目的として、平成十六年十一月に設立総会が開かれました。

そして、もう一つ、同窓会の皆さまへ情報を提供して親睦を図る方法を考えて実施したのが、「Shokei News」の発行でした。同窓会の方々のご協力により、平成十七年三月三十一日付けで創刊号を発行することができました。

部活動関係ではたくさんの思い出がありますが、一つだけあげるとすれば、平成十六年に合唱部が初めて全国大会に出場し、銀賞を獲得したことです。この日は校長、事務室長と私の三人で府中市の会場へ応援に行き、帰りに上野で祝杯を挙げたことが印象的です。

今日において、土浦二高は私が在職していた頃をはるかに超える高い社会的評価を受けていると思います。百十年を超える歴史を基盤とし、先生方が一致団結して教育活動を展開し、土浦二高をさらに大きく発展させていただきますよう、心からお祈りしています。

最後に、私の近況とお礼を申し上げます。平成二十三年三月に定年退職した後、第三十八回全国高等学校総合文化祭茨城大会の事務局職員として働いてきましたが、今年七月、無事開催することができました。土浦二高の先生方、生徒の皆さんには本当に世話になりました。ありがとうございました。



「母校への想い」

井坂 博子 (昭和50年卒業)

高校教員として教職について36年目になります。いつかは母校で働きたいとの想いは叶わず、仕事で会議室を使用させていただく以外ほとんど訪れることがなかった土浦二高ですが、昨年、創立110周年記念式典に参加する機会を得て、卒業以来約40年ぶりに体育館に足を踏み入れました。当時新築間もなかった体育館は、私の高校時代から残されている数少ない建造物のひとつです。校舎から体育館に至る通路も全く変わってしまい、戸惑いを覚えましたが、式典が始まって校歌が流れると、メロディーはもちろんのこと、歌詞もほとんど覚えており、口ずさみながら、一瞬高校生に戻ったような思いに浸ることができました。体育館からの帰り道、昇降口の校章のステンドグラスには穏やかな秋の日差しが差し込み、懐かしさ満々の記念式典でした。

高校生活を振り返ったとき、現在の自分に一番大きな影響を与えてくれたのは、英語の先生であり、担任でもあった沼尻良三先生の存在です。現在では「英語の授業は英語で」が当たり前になりましたが、当時は授業でできる限り英語を使おうとする先生は多くはなかったように思います。先生ご自身が作ってくださった英語例文集、さらに、英会話教室など簡単に見つけられな

かった時代、先生のご自宅で英語のネイティブの先生を招いて聞いてくださった英会話クラスなど、先生の英語教育にかけける情熱がいかに深いものであったか、教員となつて改めて実感するとともに、心から感謝しております。私にとつて中学時代得意科目だった英語ですが、高校に入学して最初の挫折も英語でした。使用教科書が異なっていたため、自分が知らない単語を他の生徒が知っていたことがきっかけだったと思います。自信を取り戻すには時間がかかりましたが、教員となつて、先生の姿勢をお手本に、生徒に英語の楽しさを伝えようと努力してきたつもりです。

最後になりますが、今年の夏開催された、第38回全国高等学校総合文化祭茨城大会では、茨城県高等学校文化連盟音楽部合唱部会長として関わらせていただき、土浦二高合唱部の皆さんには、大変お世話になりました。顧問であり、大会合唱部門の事務局長である吉水先生のご指導の下、礼儀正しく、きびきびと大会の運営にあたる合唱部の皆さんを見て、記念式典の折に見かけた、土浦二高建学の精神「衣錦尚絅」の額を思い出しました。卒業生として誇りに思ったことを書き添えておきたいと思ひます。

わが母校「そして未来へ」

酒井 昌子 (昭和46年卒業)

わが母校土浦第二高等学校は、茨城県立高等女学校として、明治三十六年に設立された。

私が入学した頃は古い木造校舎で、廊下は狭く天井は高く薄暗かったと記憶している。二年生の時、それまでの木造の校舎を取り壊し四階建ての新校舎の建設が始まった。工期には一年二ヵ月を要し、その期間はブレハブ校舎での授業だった。今までに経験した事のない暑さで寒さの中で、工事の騒音にも悩まされながら勉学に励んだ。完成後、卒業までのわずか四月間という短い時間ではあったが、新校舎で学べる喜びを友と分かちあった。

在学中の出来事としては、アポロ十一号の月面着陸。旧講堂に生徒達が集まり画面に映し出される世紀の一瞬を、かたずをのんで見守った。人類史上初の大きな一歩を見た瞬間、一斉に大歓声が沸き起こったあの時の興奮は今でも忘れられない。

そして、高校生活最後の修学旅行で行った大阪万博。世界各国のパビリオンや「太陽の塔」の周りは多くの国々であふれ、売店には万博らしい世界の品々が並び、お土産選びも楽しい思い出の一つとなった。

伝統のある土浦二高を卒業してはや四十余年、生活の中で毎日のように母校の前を車で通っているが、校舎も道路も様変わりしている。ここ二十年だけをみても、平成六年に四十二年振りに男女共学がスタートし、今まで見かける事がなかった男子生徒の通学姿が不思議に感じたりもした。平成十二年には私が在学中に新校舎として建設された校舎が解体され、二年後の平成十四年に現在の近代的な校舎が完成。そして翌年の平成十五年、創立百周年を迎えた。

これまでも、そしてこれからも、その歴史は刻まれ続けていく。未来を担う若者達には、日本のみならず世界を舞台に大きく羽ばたいて欲しいと願うばかりである。



校訓

柳生あつ子 (旧姓川島) (昭和46年卒業)

二〇二年 夏 土浦市 大形屋

私たち昭和初め四十五年度三年九組は卒業以来四十二年ぶりに初めてのクラス会を開きました。きつかけは、ここ数年で再会した数人の級友で還暦を記念してランチをしようということからでした。それなら〇〇さんにも声をかけよう、じゃ〇〇さんにもと広がつていき「クラス会にしよう」となったのです。

同窓会名簿を頼りに、おぼちゃんパワー全開で住所を調べたり、電話をかけた。

在籍五十三名中数名の個人と連絡が取れず残念でしたが、欠席の方たちからの近況報告も含めれば、三十数名が集うことができたのです。

四十二年ぶりの再会で、果たして名前と顔が一致するかと心配し、卒業アルバムを何度も見直しての当日でした。

受付では「わかる?」「わかる!」の声。顔、顔、顔! あれから本当に四十二年もたったとは思えない顔、顔、顔!

すでに他界した二人の級友と、六月に旅立たれた担任の先生への黙祷を捧げて開会しました。宴が始まれば、当時と変わらぬ華やいた笑顔と笑い声。誰かが持参した卒業アルバムに修学旅行の夜を思い出し、誰かの思い出話に「そんなことあった、あった」と、心は教室へ飛び、予餞会で演じた「ロミオとジュリエット」話に花が咲きました。

あの時は、大道員に力を注ぐ人、音響・衣装・役者・脚本・語り手等々、級友たちの多彩な才能に圧倒されたり、あこがれたり。舞台終了後には、感極まった涙が伝えた人、あこがれた人、人生いろいろです。愚痴りながらも、それでも、前を向いて何かを掴もうとしている姿に「明るく、ゆかしく、和やかに」の校訓は生きていてと感じた一日でした。



生涯続けられるもの

中座 由行 (平成13年卒業)

近年、生涯学習、生涯スポーツなど、一生を通して活動できるものが注目を集めています。皆様も継続して行っていることがあると思います。私はそれを高校生活で見つけたことができた。それは弓道です。そもそも弓道は中学校の部活動で始めたのですが、縁あって二高の入学後も続けることになりました。練習中など、つらいこともありましたが、練習後、すぐには帰らず皆で遊んだことも思い出の一つです。

弓道は直接、面と向かった相手がいるわけではなく、精神面での影響が大きく、自分自身との戦いとなります。的に当たると欲ばかり出るとかえって当たらないということも多々あります。いかに平常心を保ち、射を行うことができないことが重要で、一生をかけて辿り着くことができるかと思ってしまうが、それを目指そうとする自分もいます。また、弓道は歳を重ねても続けることができます。90歳近くで現役という方もいらっしゃるくらいです。卒業後は二高の弓道部のメンバー数人と市民団体に入会し、人生の先輩方に教えていただき、日々、精進しています。

しかし、最近結婚、妻の出産があり、現在は子育てで奮闘しており、なかなか練習に行けず、おさぼり状態になってしまっています。いつ行ってもあたたかく迎えてくださるメンバーなので続けることができるのだと思います。何にも言えることだとは思いますが、弓道は極めて、心がとても難しいものだと思っています。だからこそ、ゆつくりでも、二高で知り合った友人達とおなじいちゃん、おばあちゃんになるまで続けていきたいと思っています。



「人生の学び舎」

海老沼 瑞 稀 (平成22年卒業)

七年前の入学式。昇降口の前に敷かれた真っ赤な毛氈に目を奪われ、袴姿の先輩方が凛とした姿で筆を弾いている様子に強い憧れを抱いたことを今でも鮮明に覚えています。それから迷わず筆曲部に入部した私は高校三年間を勉学と部活動に励みながら過ごしました。

一番思い出に残っているのは、部長という重責の中で迎えた、三重県で開催された全国総合文化祭です。顧問の菅谷先生、講師の桂木先生のご指導のもと、部員を束ね、大きな舞台で演奏した文化連盟賞を頂けたことは、今思い返しても自分自身を一回りも二回りも大きく成長させてくれた貴重な経験でありました。

高校卒業後は幼少期から憧れ、目標としてきた幼稚園教諭・保育士の資格取得に向けた専門的な勉強ができる大学に進学しました。大学ではパネルシアター部に所属し、保育者としての実践力や表現力を養うため、全国の幼稚園や保育園での公演活動を積極的に行いました。保育者を目指すという一貫した目標を掲げ、四年間常に向上心を持って活動に取り組めたのも、二高で過ごした日々が私をそうさせてくれたのだと感じます。

現在は、その長年の夢を叶え、土浦市立保育所で保育士として働いています。二歳児クラスの担任になり、未来を担う子どもたちの命を預かり、成長・発達を援助する責任を重く感じ、日々奮闘しながらも、子どもたちと楽しみ合っていると感じています。

最後になりますが、高校三年間で培った友情はかけがえのないもので、今でも当時と変わらない関係で、心を許し合い何でも話せる大切な友人を持つことができました。またこれも地元で就職したご縁でしようか、偶然にも初めて担任を持ったお子さんのお婆様が高校時代の恩師であつたり、職場の同僚に先輩がいったりと土浦二高を通じた繋がりを嬉しく思っています。今までの出会いそしてこれからの出会い、人と人との繋がりを大切にこの先の人生を歩んでいきたいと思っています。

